

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 難波 えみ

論文題目 様態と結果の副詞的表現に関する計量的・記述的研究

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	玉岡	賀津雄
委 員	名古屋大学教授	杉村	泰
委 員	名古屋大学准教授	鷺見	幸美

## 論文審査の結果の要旨

### 論文の意義

難波氏は、様態と結果の副詞を語順について、新聞のテキストデータを用いた実証的なコーパス研究の手法で、様態と結果の副詞の文中での主要位置を特定し、両者の語順の違いを区別した。さらに、統語理論ばかりではなく、意味論の研究論文も精読して、多様な視点から副詞と動詞の共起制限および副詞と主語・目的語の意味的關係にまで着想を広げ、副詞の位置についての議論を展開した。また、結果と様態の副詞的表現について動詞句の統語構造ばかりでなく、語彙概念構造や意味構造からも考察した点で先進的である。難波氏の博士論文は、コーパスを用いた計量的な手法、用例の観察、意味・統語理論の複数の視点から副詞的表現を捉えて総括的に考察しており、非常に優れた博士論文である。

### 論文の概要

博士論文は、現代日本語における様態と結果の副詞的表現について観察、考察を行ったものである。様態と結果の副詞的表現は、ともに動詞句内に表れる点で共通しているが、両者は言及する事態の側面が異なっている。様態の副詞的表現は、動作の展開に伴って、動作の過程に内在しうる様々な側面を表したものであり、結果の副詞的表現は、動作の結果の側面における対象の様子を表したものである。博士論文では、動作の過程から結果の側面を述べる多様な副詞的表現について、様態・結果といった動作の展開過程ではなく、副詞的表現の叙述性に着目し、分析を行った。

コーパスによる副詞的表現の分析では、副詞的表現の基本生起位置と動詞との共起パターンについて実証した。まず、基本生起位置について、様態の副詞的表現 23 語、結果の副詞的表現 17 語について、新聞コーパスを用い検索した。そして、目的語と伴う他動詞と共起する場合を対象に、副詞的表現の現われる位置を数えた。その結果、様態の副詞的表現は *SAdvOV* と *SOAdvV* に同程度分布していた。他方、結果の副詞的表現は *SOAdvV* に分布の偏りが見られた（全体の 8 割）。副詞的表現の分布について、様態の副詞的表現は注目する動作の側面、用いる表現の選択は書き手の判断に委ねられるものである。副詞的表現を置く位置も書き手の判断に委ねられるとした。

結果の副詞的表現の分布については、結果の副詞的表現と動詞は 1 つの単位として記憶されているため、動詞の前に分布が偏ると述べた。また、副詞的表現の分布について、情報の重要度より説明を試みた。並列文における語順と第 2 文における副詞的表現の省略可能性を観察した。様態の副詞的表現は、目的語と常に情報の重要度が常に相対的に決まる。このような性質のため、話者がより重要と見なすものが動詞の前に置かれる。結果の副詞的表現は、絶対的に情報の重要度が高く、動詞的な述語情報を担う。このような性質のため、動詞の前に起こり、*SOAdvV* に分布が偏るとしている。

また、エントロピーと冗長度の数学的指標により、副詞的表現と動詞の共起パターンを観察した。各副詞的表現について、共起する動詞の異なり頻度と述べ頻度を数え、エントロピーと冗長度を算

出した。分析の結果、様態の副詞的表現は結果の副詞的表現に比べ、共起する動詞が多様であることが分かった。この結果は、様態の副詞的表現で表される動作の側面の選択は、書き手の判断に委ねられること、また、結果の副詞的表現が動詞と1つの単位として記憶されている可能性を指示するものである。さらに、個々の数値の類似性に基づくクラスタ分析の結果を行った。また、副詞的表現と動詞の用例を観察して、1つの語が常に一貫して様態・結果を表す語として振る舞わないことを述べた（細かく調べる：様態，細かく切る：結果）。

様態の副詞的表現と言われるものについて、用例を観察した。そして、叙述性の有無、語の辞書情報の違いにより、典型的動作様態、状態性動作様態 1、状態性動作様態 2 に分けた。これら3種の副詞的表現について、それぞれ、意味構造における規定を試みた。典型的動作様態は、非常に多様な動詞と共起し、特定の文要素と叙述関係を持たないことから、ACT, BECOME, MOVE などの意味範疇を修飾すると述べた。特定の意味範疇を指向しないため、典型的動作様態は非常に豊かな語彙である。状態性動作様態 1 は、動作主の状態 ([y BE AT-z]) を表す。状態性動作様態 1 は付帯状況節として言い換えられず、述語として用いられるとき、「X (人) は / が Y (状態) だ」の形式になる（社長が冷静だ、友人は愉快だ）。動作主に対する叙述関係を、影山 (2002) で提示された「項の補充」により、主動詞の概念構造中の動作主 x に補充した ([λ x([x=y BE AT-z]) ACT...])。修飾概念 [y BE AT-z] の y は被修飾項 x と同一指示であることを、修飾概念 y を「x=y」とすることで示した。また、状態性動作様態 2 も動作主を指向するが、付帯状況節で言い換えられる。これより、主動詞の概念構造に対して、付帯状況を表す WHILE (影山・由本 1997) により、付帯状況節部分 (~になって、[y BECOME [y BE AT-z]]) を表した。また、動作主のある状態への変化に内在的コントロールが認められたことより、従属する概念構造の y を「x=y」とできる。「x=y」となることで、主動詞の動作主 x との指示対象の一致が示される。

続いて、これら3種の副詞的表現の統語構造への写像を検討した。受動化操作と動詞との複合名詞化より、典型的動作様態は、目的語と動詞からなる VP に付加するとした。状態性動作様態 1 と 2 は、動作主が生起する上層の動詞句 PredP 内に起こる。状態性動作様態 1 と 2 は、動作主と叙述関係を持つので、小節構造により、Pred' で、動作主にコントロールされる音形を持たない PRO に対して叙述を行う。状態性動作様態 1 は、Pred' の小節内に留まる。一方で、状態性動作様態 2 は、「X は Y (動作性名詞、補文) に Z だ」(学生は{勉強/本を読むこと}に熱心だ) のように述べる性質を有する。補部に動的内容をとる類似性を反映し、Pred' の小節構造から PredP 付加部へ移動すると述べた。このように、様態の副詞的表現は3種に分けられ、それぞれの語の性質が意味構造、統語構造に異なった形で規定できると考えた。

さらに、結果の側面を表す副詞的表現について観察した。中でも、結果様態を中心に分析した。結果様態は、その状態が動詞に含意されておらず、また、叙述対象が文要素でない場合もある。結果様態を叙述対象が項である場合 (タイプ 1) と叙述対象が項と隣接する名詞句である場合 (タイプ 2) に分けた。結果様態として認められるものを検討し、その成立条件を述べ

た。結果様態の意味構造の規定には、影山（2002）、Kageyama（2002）で提示されたクローン操作を用いた。クローン操作は、元の概念構造の一部あるいは全体をクローン（コピー）し、つぎ足すことで、新たな意味関係の規定が可能となる。結果様態は、有界事象であることより、下位事象[y BE AT-z]を想定できる。結果様態のタイプ 1 と 2 は、下位事象[y BE AT-z]をクローンすることで、叙述関係を表すとした。

統語構造でも、クローン部分に対応する構造を認めた。結果二次述語は、それ自身で動詞化しうのに対して（花瓶をこなごなに割った＝花瓶をこなごなにした）、結果様態は、動詞化すると意味が変わる（野菜を大きく切った≠野菜を大きくした）。これより、結果二次述語は、動詞の姉妹位置の V に生成されるとした。結果様態は、動詞句の解釈により、文脈的に判断される。そのため、結果二次述語と区別し V' に生起するとした。そして、叙述関係を捉えるために、V' に叙述対象と結果様態からなる小節構造（RPP 句）を想定した。タイプ 1 の場合には、小節内の主語と対象（内項）が同一指示をなす。タイプ 2 の場合には、メトニミーが成立する。また、クローン操作と RPP 句を想定することで、結果様態が経路指向の移動動詞とは共起しないことを説明できることを述べた。

最後に、叙述性に関して、典型的動作様態を中心に、対称性が見られることを指摘した。状態性動作様態 1 と 2、結果様態、結果二次述語は、動作主や対象に対して叙述関係をなす。それに対して、典型的動作様態は、動作のあり方を述べる。特定の要素を指向しない典型的動作様態を言語構造的に無標とし、叙述関係を持つことで、しかるべき位置で叙述関係を成立させる状態性動作様態 1 と 2、および、結果様態は、構造的に有標であるといえる。また、動詞との共起多様性、動詞との距離、状態を表す[y BE AT-z]の現れ方には、連続的な変化を認めた。これらの連続的な変化は、それぞれ意味構造や統語構造上で動機づけられることを述べた。

## 論文の審査

口述試験では、学位申請者から博士論文の内容に関する説明が行われた後、審査委員からそれぞれに質疑応答が行われ、主に以下の点についての質問やコメントがあり、学位申請者との質疑応答があった。

- (1) 使用頻度による結果は産出の結果であるが、処理負荷とはどう違うのかという質問があった。この質問を言い換えると、VP 内での処理負荷が同じであるのに、どうして、産出頻度に違いがあるのかという意味である。プロセスが異なっても、産出結果でみると異なる結果になることがあるという説明であり、納得するものであった。
- (2) なぜ、新聞コーパスなのかという質問には、話し手・書き手の恣意性が頻度の差を生み出す可能性があるとし、新聞業界では、語彙の使用や書き方が規定されているので、むしろ小説などより適切なコーパスではないかという答えであった。
- (3) エントロピーが小さいほうが、共起表現ユニットの記憶がより強いと予想されるのはなぜかという質問に対して、「共起表現の記憶」という観点からの説明を行った。一つのユニットというより、副詞と動詞が強く結びついているので、両方が同時に活性化されるという説明であった。
- (4) 様態の副詞的表現について「書き手の恣意性」という表現があるが、定義が不明瞭ではないか

別紙 1 - 2

という指摘があった。副詞であれば、ある程度の選択肢があるが、書き手が好きなように選べるという意味での恣意性であると説明した。

(5) 日本語と英語の比較において、「自己没入」という概念で議論しているが、そういう一般化ができるのか。なぜなら三人称であっても言えてしまうので、このような説明ができるどうか疑問が残るという指摘があった。この点については、今後の課題とした。

(6) 様態と結果の副詞のコーパス計算をやり直しても良かったのではないかと、またそうすることで、より一層研究を展開できたのではないかと指摘があった。これは、今後の課題とした。

(7) 各章で副詞を異なる視点から取りあげようとする熱意は感じるが、そのために一貫性が欠如したのではないかと指摘があった。この点については、今後の課題とした。

#### 論文審査委員会による合否判定

以上のようにさまざまな指摘、改善点、今後の検討についての助言があったが、それぞれの点について適切な回答が得られた。全体として本論文は質量ともに博士課程後期の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員一致で判断した。したがって、本論文を合格と判断した。